



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

卷之三

臣藏書止
文通

人保之取蛇尾目錄

中年
丸

學様のねくま九字

あまむじと云ひて
はる

かうそもせまへ

あ
ま
つ
う
わ

よのくば

あ
つけ



卷之三

神の訓

卷之十一
翁の木
七代口訣注誤

おのれの事をやまうと

おもてなしとくの菓子 雅記

卷之三

之子牛

墓所にて

扇のうれめ

おとゆ

そもれ

ちよひ字訓美

禁裏門松

躬恒

あ

ゆき

むが

人

人よタもえ

多とよめ

人をよめてあそごとえ

みとご

あをそべやうよ

このくよ

ふくらへり人あはのく

拂衣

たゞくわき

吉やくじ

ひんなく

家隆

なまくこれとくさにす

え名狀

くろが乃骨れあつ

くらあくい

あ

ものいす

あしかられづ

まことよめ様

病仰山

耳をきく

久保之取蛇尾

○蟬丸事。百人一首宗祇およえ。蟬丸を育団とひそむ。あ
渴のうち渴見をもかまく。まこと。或およ。ニ支院を説とす。
ばれをせん育団とひそむ。渴見たるは撫視云々。お坂の園にて
ゆうめんを足してとく。育団ならふ。だらくあくび。こは
かのほ。ともに育団。あくび。また。まこと人の仕事。不
わう

今樂よげは撫葉の詞也。蟬丸の自記。あくび。撫葉の事也
あくびて。さわやけり。ちうも。わづか。とく。あくび。れきを
うあて。ちうが。あくび。さわらし。あくび。の。人をあて。とく
つもあくび。按。江談抄曰。博雅。三位。高名。之
管弦。之。人。而。美道。重。求。會。坂。目。暗。琵。琶。最。上。之。由
風。聞。世。上。人々。雖。令。清。習。更。以。不得。又。住。所。遠。以

所狹而行向人少爾博雅先以下人内所謂様等書而不思懸所為住京都居而過与加之土瞞目暗詠歌曰世乃中波土天毛加久天毛須久志天牟宮毛和良也毛半天之奈計礼波土詠而不答使者以此由云博雅思様此盲目命在旦暮我壽雖不知尚流泉啄木云曲者此目暗耳社傳奈禮相構天聞彈欲傳之處三箇年間夜向相坂目暗許竊立門宅頭仁更以不彈三年土云八月十五夜為矇曇風少吹而博雅思樣憐今宵彈良年土思天琵琶譜具天向會坂如案琵琶遠使鳴程盤涉調鳴爾博雅聞天尤有興啄木是盤涉調也今夜鳴此弦空欲彈哉土思而嬉思間目暗獨遣心無人詠歌云逢坂乃閑乃嵐乃嶮尔

志比天曾居多留与遠過土天下略前の事は中ノ事でかくすと一の事を新古今入る後は闇の事なりと云ハ
後古より入考す作者はれどもあらずと云はる事も甚る盲人かくす疑ひあり旧本今昔物語卷廿
一云今昔博雅朝臣ト云人有ケリ延喜ノ御子ノ兵部
卿親王ト申人ノ子也万ノ事止事ナカリケル中三モ管弦
ノ道ヲナン極タリケル琵琶ヲモ微妙ニ弾ケリ笛ヲモ艷ニ吹ケ
リ此人村上ノ御時ノ殿上人ニ有ケル其時會坂ノ閑ニ
一人ノ盲菴ヲ造住ケリ名ヲハ蝉丸トゾ云ケル此ハ敦實
ト申ケル式部卿ノ宮ノ雜式三テナニ有ケル其宮ハ宇多法
皇ノ御子ニテ管弦ノ道極ケルナリ年来琵琶ヲ弾給ケル
ヲ聞テ蝉丸モ琵琶ヲナン微妙ニ弾ケル云々以下江邊おと
全く同じに於を挿て全篇を記す。匡房卿・隆國卿。

皆を代々近き人なり。家より不羈にてかくたゞぐる
達久の子也。はれ盲人たゞくらひかゝし。範並童弟
お。東海ほすすも。右の役よ同し。ちくまと長のをあおり。
金坂よ園のゆゑとや。むづのはれわらの役をうしなは
そして。ことに御とぞうて役院をもべ。一書云。會坂の園のゆゑ
園の神祠を建てる。市と神を祀。城下町といひ。橋は
河を橋船と云。越後は、越後川閑谷。光明神奉幣。主は園の神と云。む
うふくの帝は使ませ。お祭りなし。うら峯の主は良
ウねてがまくとどき。是よりは人縁をなし。せむ村ハ村
上の朝せんざれ。はれよりは代お通なり。りふ説も出で
まくとどき。ひき弁雅をと集は。はれうす。城下町
いづくのあれどとの役。ハヤモトスムのね。同
又云。彼赤兵のと代はれて。ゆきとおじ。そ
せゆくとくわやれは。かたりあれとひづく。まくはやうめむ

是手もの。のと御きがねの和琴。といふと執ふ。なか
琴ゆき。とはるよう。いをぬていちく。はこまよへ金坂
は園路よ。手ハへゆれ。まくのはれや。るをとたまん。そ
ハ琴をとて遊つて。まくのはれ。はくがねれ。和琴正説
うやといふされど。さくられ。まくのはんす。管弦修竹。れす
を引き。のうきて。琵琶琴の音。引ひや。め事ももべ。し
ゆく。まくのは琴を。まくとよす。まくの。まくの。まくの
金坂。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの
まくの。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの。まくの
君充^ル行。昭君在路。愁怨。於馬上。彈琵琶寄其恨。云。
琴ハ弦の景。上がまく。弦の惣名ともなれ。あり。叶。まく

人のうやさきの聲、やまと無、など名付よりとも知るべし。又

博雅三侯延喜帝
王子克明親王子
清正後中書王子
御子並輔之春子
智顥抄三見エタリ

博雅三侯延喜帝
王子克明親王子
清正後中書王子
御子並輔之春子
智顥抄三見エタリ

芳樹宿は也駕、村上の古河に及上人まで。ば丸は板曲を
ひきりやうれい経もづくす。村上の古河すすむ。傳國^{今昔書院作}乃
ひまて七十歳頃^かがまほ。現存して事を知る人むろ
一しは水尾院え和門講修すちよ。古河集はゆれう歌
入きて延喜帝ハ十三年まで御良位あるを。延喜帝
のじはば丸サニ事なうと。是は考る事なうと。ば丸は十
年五年未だまくし。在をかとさよあらはは従ふ。モ亡因命
在旦暮とちまくまくで。在年とばかりれど。その三條原忠
平云小野道風などを延喜帝村上あ報は仕へんとあり。ば丸
ば丸は板曲をうるべり。せ代おまどりがく次清^{キヨタチ}あ

ば將よりばれくなまび。ば駕の事をねどもひてどうや
うやあす井良が将ハ嘉祥三年三月廿九日出家。寛^{四イ}
平二年正月寂^スとあり。敦實親王ハ延喜七年十一
月十三日加え服^ラと。日本紀畧^{マクシタケ}と。を歎き
よはてばれなまひ。ば丸をうるべるほのくも。是を
ぞせばあまとつべー

○近代の和三の考流は。向葉或ハおづかざり下れんとし
て。あよきとよもつて。次とりよ人あわ。そいもあわすだれ。
おきよ万葉集等ナハ。ふまをあくいて。よ坂はよひもあみ
て。ほきて角ちゃん見え。帝のた太正橋官称。よ絶よ拂製^ハ。
仁和のみよハ。遍服よ。ナ乃が。おひき。かく。かく。おひ
うくもなうくて。えうやうたあす。もうれど古くまよ

ううぬかくのう

○ すひをあくとよひ候なむどくの程ハシマありくに
のきやうなはれ却く古風カモクなく。方ニ。の風ハラハラ
きをせを歎ミカカルクニて公之阿流アルクニ久尔クニ。同十四。あ
安流アルキ吉ヨシか。同十八。もとてモトテ安流氣騰アルケド也
アセ。是ふの体コトよろづ

○ほ雲簡矣よ云古矣よ衣架すれまわる川をとほく、
來のいづるをやひふと申ゆアヒヨ。古矣。衣架れ事がくと
えし。今より衣架をタナといふ。いう。和名前よ。衣架和名
美曾
架介とわらう。はり。はりの主を云。あや。うきぬを。みそをうけよ
ろ。くくぬひ。うけよ。是をとすよ。いつとよめ。散木すよ
は。かよ。いのつかれ。わら。うきぬ。すまれ。くわ。とく。人れが
きのを。頭脳ほよ。いのハ衣架エソカケ。とく。きものからもの。くもめ。え。衣架。
をタナとよむ事もあらまやて居。衣架のまわる事とほく。

ハ・ム・ヨ・ハ・ノ・ナ・ウ・ル・ト・リ・ス・ア・ル・モ・ツ・ウ・テ・シ・
ト・リ・ス・ル・ハ・モ・モ・ト・ア・リ・ミ・ル・ア・カ・キ・モ・ヨ・ハ・袖・の・一・マ・ビ・コ・
ロ・モ・ア・ド・リ・ズ・袖・ハ・衣・の・よ・れ・ド・ナ・れ・ド・キ・ツ・ウ・モ・モ・即・衣・手・
の・キ・衣・宇・ラ・ソ・ト・読・ハ・和・名・鈔・云・袖・所・レ・ヒ・受・手・ラ・セ・
御・衣・ナ・ト・ニ・知・ヘ・レ

○ハキシカガヨ学ハ松モモニヒツラ・ヨクシカ・梅ヨモニ
モサナフ・様モモカセテねくシモト・在る風景・と按ニ、首
か万葉ヨ、詩のソアレモコクシニトヨミア乃たれ皆
ニ・紅櫻本自作_ル鶯栖_ト・著云作_セセシア又ほゆ御てハ、
詩モト九百のうちヨハムアシヒトヨリテモトシト・万葉第十九。
みそりのよれ井の林ヨシキモトモモウシモトモウス・と
御苑

○和名鈔云。株唐韻云。音永漢語抄。木可爲笏也。云。契冲云佐久木。比也當拍。

手笑云。リムにて順の説所近なり。ハモヒガニ。シテアヒル
チの參ハ。六位の笏。本ラ伐シ。按。位山ハ。行濃。シヤウ
の參ハ。近江侯。ナ。國名。アリ。昔。モ。國を。傳。ス。モ。ト。カ。く
チ。ツ。ケ。シ。ム。ハ。位山。シ。ヤ。キ。モ。參。昔。モ。友。佐。昇。進。の。役。徳。エ
縁。名。ナ。ミ。ハ。能。中。生。エ。乃。られ。株。サキ。を。伐。タ。ハ。キ。チ。の。古。役。モ
笏。木。ト。モ。コ。ミ。テ。機。リ。ナ。タ。キ。ミ。モ。ア。ヌ。元。強。の。國
日。基。總。位。シ。メ。リ。モ。ヒ。の。あ。を。笏。の。ミ。ク。ニ。の。ロ。セ。ル。レ。ト。モ
ハ。聖。沖。の。や。ム。ヒ。を。モ。ア。ヌ。ツ。ク。ル。モ。ヤ。ア。ム。

○奥。義。抄。云。一。言。主。神。宿。宣。レ。テ。帝。ニ。奏。レ。タ。マ。ハ。く。
役。優。婆。塞。ト。リ。ア。ミ。の。五。位。を。か。フ。ム。シ。ク。ン。ト。モ。ト。シ。ム。ジ。ベ
レ。ト。章。け。ツ。ケ。シ。ム。ア。リ。役。御。者。を。伊。豆。の。國。ニ。流。レ。ナ。リ。
ち。つ。ト。ミ。畧。文。今。案。ニ。類。聚。國。史。卷。之。ハ。十。七。日。文。武
天。皇。三。年。五。月。丁。丑。役。君。小。角。流。于。伊。豆。島。初。小。角

住。於。葛。木。山。以。況。術。稱。外。從。五。位。下。韓。國。連。廣。足。師。
鳥。後。害。其。能。詫。云。妖。惑。故。配。遠。所。云。ば。從。可。為。正。乎。

○土。佐。口。記。ニ。カ。ク。り。ひ。テ。行。ム。ふ。な。ミ。ミ。ナ。リ。人。ち。く。ミ。ミ。く。て。
く。す。ナ。リ。ハ。キ。テ。カ。イ。シ。ム。ム。ク。ヒ。セ。ル。ト。リ。ナ。ム。ア。ム。代。オ。モ。ア
ム。ナ。ミ。ア。ヒ。教。ス。ア。ム。サ。ダ。リ。ハ。ム。マ。ハ。往。ス。ム。ク。ヒ。レ。ト。ハ。ナ。ミ。テ。海。賊。ア。ム。ア
テ。モ。災。難。ア。ム。ハ。前。ナ。ミ。テ。モ。海。賊。ア。ム。カ。ナ。ト。モ。災。難
セ。ム。シ。ナ。ク。因。果。經。ア。ム。サ。ヤ。レ。ン。シ。ハ。世。ナ。ト。ハ。佐。ム。カ。ト。モ。國
守。ナ。ミ。日。浦。城。ナ。モ。逃。ス。ム。ア。ム。ア。ム。ト。モ。浦。城。ト。モ
出。船。を。移。ス。ケ。テ。モ。ム。ク。ヒ。セ。ン。シ。ヤ。ク。レ。モ。ト。報。レ。怨。復。讐。言
ナ。ク。う。つ。日。後。ナ。後。妻。ニ。モ。國。ヨ。ア。ホ。ホ。ム。カ。ミ。モ。人。ム。ク。ヒ
セ。ム。ト。モ。シ。ヒ。テ。ロ。ソ。而。人。の。兵。ミ。テ。ト。リ。ム。テ。日。一。常。報。の。事。

よあくは因累経よりえす

○ 因書カタシム カタシムサヤセニ あけぬが
のほきとも川カタシム みなれ、かきうるのカタシム かまほカタシム。因書カタシム
か、かひハ虚舟カタシム し、人カタシム まみぬ舟カタシム なわと渡カタシム やカタシム。徳カタシム。
是カタシム はよカタシム くカタシム まくカタシム きをカタシム め、そふカタシム のくカタシム てのまくカタシム 舟カタシム。
改カタシム の詞カタシム は、かくカタシム て、かおひきのカタシム 因カタシム 書カタシム。なまカタシム はよカタシム かくカタシム とカタシム は
の傳カタシム なむ。くカタシム うせカタシム せカタシム たカタシム て、あけカタシム ぬカタシム とカタシム てと
達カタシム べ。あけカタシム ぬカタシム とカタシム ふのカタシム ぬカタシム が。年カタシム 行カタシム 日カタシム 纪カタシム 云カタシム い。よ
わカタシム とカタシム あきぬカタシム まカタシム う。もくカタシム まカタシム みカタシム ちカタシム あけカタシム けカタシム とカタシム
けカタシム あけカタシム もカタシム う。めカタシム みカタシム とカタシム 神カタシム 代カタシム 纪カタシム
一ト夜ヨク 之間カタシム には間カタシム あわカタシム だ。ゆめカタシム う、ゆめカタシム 向カタシム た
○ 又カタシム ねカタシム ひカタシム うすカタシム なカタシム う。もくカタシム がカタシム うらカタシム ばカタシム がりカタシム て

○ほきよ弟四十一後よりうひなあちばあよばけ
のみほくとあのよくよたいて后てわふくあす。承付ひつじい

まうむつて、居めつてすまう圓まするまひなう。是を
スム人あきらめあさみく。そのまもわれえ。文勝おは。是
あもとよゆかへとくらむと。奥ふうくおもひぬまなう
と注せり。あくび。あくもと。今保。ガラル。或ハアキルナガ
ツカシト。彼はうれあやさき樹と眠るをみて。或ハ嘲
リ。或ハがくこといふ。傍ねゆゆた。第一のうじよ。あ
あもと。あくねと。よむわが。宇治おま第一のうじよ。あ
ざく。無むある。寒がまな。口第三。是も。井和
田の原をねうと。是も。修教一間許のま。居候ひて。一
おととすをみだす。はものあがはずと。よみ。大
水鏡よ。はたけ。海の敵を。よみ。よみ。のまうたは
丘をすれぬ。門をあては。付ぬ。草木をぬりて。根
上をぬり。か。是も。付ぬ。是も。人をも。事か

まうがく。是も。のふをみてまう。遊仙窟。警新アザミカと

よみ。は訓義を傳く。駭驚見アザミたと。ま

○一書古今集序注云。よりれの構を人丸うらよ。ハ
かくし。おほくらと。あらは。づきのす。是は序中の私
す。又武三室古學を。古傳。ありて。人丸
のうちのうち。人丸よ。かね。乃色のちくよ。人丸
は。す。二年を。付く。まく。乃色のちくよ。人丸
ともい。よ。ある。ぐ。被。よ。是。は。後は。撰事中題。され
人丸

まう。あく。まく。人丸よ。人丸よ。人丸よ。人丸よ。人丸よ。
は。上の。を。引。あ。く。付。ま。せ。ま。う。へ。け。後は。撰。の。う。人
磨。ま。の。人。國。れ。名。を。よ。の。う。に。但。う。を

まう。あ。ま。ち。ま。と。み。う。ハ。下。舍。は。ま。と。人。丸。と。て。續

後撰よアレ。も送なまくし。彼人たまとゆもみの行司
ううむとゆめり。能中國の名をよある事。人、廣めじよあ
ら。も送ハ、畿内ふケ國。やアモク。やマム。がモ。づ
づ。も出せむ。生ツ人、廣めゆ。畿内五國。もりよすも
つ。もと出せむ。生ツ人、廣めゆ。畿内五國。もりよすも
づ。も。文武天皇大寶二年十二月己酉。太上天皇
不豫。○今四畿内講金光明經。又。大和。山
塙と次第。仁明天皇の御。續日本後紀云。承和三年冬十月己未。
ノアヤシ。續日本後紀云。承和三年冬十月己未。
舉前之例。畿内國。次以大和國。慶_中之第一。勅。空據_下新
式改之。以山塙國慶_中之第一。又和泉國。和名鈔云
國府在和泉郡。行程上二日。下一日。靈龜二年割河
内。國。大鳥。日根。兩郡置此國。云。はす。利水をもと
て。ふ戻内。か。契_テ。國。向。事。弘仁十四年。割

越前國・加賀・江治・兩郡置此國と云ふ。あらき、家内
の國といふ也。山岸大和と次第ももも。和らかがちかくの
國のやまともも。やまとはの事たりん。國れどもよ
きもさうべぐれたのびよあきよぐ。さて彼古く之序中承す
のみ。又空行景筆記云

ちきハモモムカハヤムシニシテヨリおとれまくわ
み竟考はモヤのちれ玉傳承事よもとく。之抄よ。竟憲の
深秘がよ。もとうを教へば。いぢく。古ノ序よ。北川のもと
ちと。うふのぬめよ。すう。さて。てんねど。かくて。えあ。よ
のよれさく。ぐれう。ゆよ。そか。も。かく。と。かくて。えあ。威
人云。嘗は。度の。ぬ。後。續。朝。た。よ。古。く。集。を。か
し。底。あ。う。ち。ふ。よ。き。す。だ。ん。あ。わ。う。う。か。と。ハ。一。大。事。と。お。に
至。が。く。後。續。か。よ。古。嘗。度。の。も。も。も。も。て。お。一。紙。と。と。て。備

上覽。もひよきうと教せられ。本をさうはる。た
よあめさちゆく
ちくらちくらひやくらんゆうれよのふの花がどうを
はあうてけく。まく。まく。あく。ほんの後
きてひや。鳥よや。かくくひ。つまよしゆめく化え。あくや
くひきて。はる。おくれは景の漠よあくは。うそとおうし。あ
細よみて。い

月のひそもさくられぬうけよゑそめまやねのまゝ
はゆすまでせんに沿え付くとあ。ほひき冥かうへけれ
令あすきを承取れゆきかくあれどたうがうら事うて得
へきくまなづくれど。彼ちくわちーの、うちおろくまされ
耳よりて。上代のあともうえど。識者不くに時ひて承於る
づく。但し承考る古今秘注も。古事記の義をやうやう

アタマのうきえとあままれ。行家のアタマ。此文書にてぬをち
なまひあまはだをもつて事。お葉を拂とつて対よか
人車らまくふ納れ。ほま取しき。安沖も回義だわ
○伊勢押領。又持まくまあよアラヘ。がさうちーりう。とつよ。あ
やめの根をさばいて。ちやうふの葉れいりうをさりて。さや
よ入く。ゆびはまくまくたまくまくまくまくまく
しまく。なでし。ありまぬ。もしもじゆ。あつひ。あやうびれ花をもち
てかづく。キムソといふと。お顎がよろこびます。

○今俗よきてあつゝ菓子よ。わづくこゑとつよめあり。うき
いよづつよづさむねや。若つゝ年を十八え。は性すゑえ三
白きかくえへよわせぬひくよ。わづくこゑをとくせたすひて。
アカトトトちてゆのほよあて。よそくくもせぬひくよ。
古上のまめよ。ちくくとちくくとくとく。又ほ太、府系

う。仕事中納でまづいものがほんとある

五

○俗よ大膳ハシタケを公のアマミとアマミも行スル也ナシ一方ニ
「おまけハシタケ、あマミさんアマミ」うともあんマツイめかひつじ
○従マサニ居リの容カタ游フきマツヒふマツヒひマツヒハマツヒ起タチ居リ威マサニ儀マサニと
さゞまれハシタケ安アマミ康アマミ紀アマミ云ハシタケ今アマミ妾ヤツコラ等アマミ顔カ色ホ不マツヒ秀マツヒ加マツヒ以マツヒ情コロバヘ性マツヒ拙マツヒ之マツヒ
若シテ威マサニ儀マサニ言ハシタケ語ハシタケ如ハシタケ毫スエハカリモ毛ハシタケ不ハシタケ似ハシタケ王ハシタケ意ハシタケ豈ハシタケ為ハシタケ親ハシタケ乎ハシタケ云ハシタケ威マサニ儀マサニ乃ハシタケ
すハシタケまハシタケよハシタケしハシタケトハシタケ多ハシタケ

○自身も事をよづとやふ、手のカラを以てもるなよ
きのいテテチカラチとツ直モ、万葉七、君キミガタメ為手力テヅカラ織オレル在もく
○物よ歌ふとキヨツとまくとつゝと古歌かう、五箇音おふふ
大嘗會御禊れ清幸ればきて、朱雀門くぼき、その人ぞさ
よまとおきくアトモク

○今迄多用なれば、うる大牛也。俗コツテヒ牛と云ふも古語なり。一方紫九郎杜牛ト云ふ者も見えたり。コトヒコツテヒ通れ。又是も前の通じと見て、ツヌニモを流れ

○今後めをひよむかうて令りふと。それくばとよも古きたゞ。
和名鈔祭祀具葉手葉椀ヒラテクボテとあり。いよへ。あのせせやまと
よめをもきて。およどをす。人ヒトも含ひな。う。一方あよ
がりて。けよむらいひをよれ。す。あれハ椎のせよ
きみとよ。葉椀クボテとちみとよ。まよのうげよ。よもと
用ひ。さればといひな。ぐ

○今俗葬子_ノよ_ハ、老_ハ、_{シテ}草履_ヲ脱_シ於_ス也。天野氏云、神代卷有伊弉並尊神退之役、諾尊至海濱、_ノノ_ニ游_ス。下伊弉並尊_ノ神退之役、諾尊至海濱、_ノノ_ニ游_ス。去身之濁穢之事、說者_ハ徳知_ハ為我國祓禊之起源、而似忘我國葬事之故、謹按魏志倭人傳云、倭人死已葬、則舉家詣水、中潔浴似練沐云、晋書_モ、謂之曰已葬、舉家入水得浴身潔以除不祥、是實合我故知我古俗皆如此、故傳云、諾尊始祓除、以是見之、則諾尊

投杖。投帶。投衣等。亦我古俗葬事畢。則舍衣帶及杖。履者故事也。今世會葬人脫草履者。其遺風也。云云

○俗よ。夏まくらうと。あひきゆとりて古むなう。狭衣よ。友
はのこまうとも

○人のうねにうみがもくよと。向かふみゆくと
ゆきうきよ、れもく。うどくとくとくとく。
○やまくまくたとくとくとくとくとくとくと
あまくまくとくとくとくとくとくとくとくと

○扇れづなめ、蟹せき同よ似て是をもうけなむへ。源太
府主ようちよて、ちまのまけれあまきのかゆくよやくへ。
とくにそのハモリテ

かよひめのさむかく そよがよ

かよれめの二ノのヌノミテ、かのをもといひを、今ハノとナ通して、がなめもとひすや

○俚俗、病者などの物食ぬを、おもゆもゆうぬといふも古語のまなび。おとせもゆうぬと、水を通じて、といひつゝ。ハヨリヘに水をモヒといつゝ。神武紀ニ主水^{モヒトリ}又催馬樂井^{ムシマツヨリ}モヒモヒともいふ。今おもゆといひ。赤蓬藻^{アキラマシ}ひやうなるおきひ汲りともいふ。今おもゆといひ。ヒユ画鵠^{アヒル}たう。契仲^{ケイジウ}いちく。モヒハ煮水也。唯可^レ云下用飲食^ニ水^ニ不可^レ指^ニ河池水^ヲ言毛比^ト當辨別^ニ。今案^ニ御鎮座本紀^{ニオモヒ}御水^トあり

○今俗人のぬの中^カくぼ^ナま^トと、おやくもといひ。飯匙^スと、土やく^スと云^フ。中^カくぼ^ナま^トを、おやくもと云^フ。古流^{カク}かく^ス。岩^{イハ}斧^{ハサミ}二。岩根^{イハナ}とく^ミて、なづ^ミつと^トと^トあ^フ。岩根^{イハナ}ナリ。けさく^ミてといづ^ミよはし。レヤの切サミ^ミとム。古ハゼ^ハか^ドのくぼ^ミ事^ニ多

くいひく。今ハ莫^ハ通^フ。よなづ^ミ。

○俗よきとおもくもな^ト。よ内^ハ方七

曾^{サモ}と^トと^ト。昔^{サモ}の常^ハ通^ト。ゲ^ミま^トア^シゆ^ク。

○俗よきとおもくもな^ト。城^ニナラベ^ト。い^フモ古^シナ^フ。古事記^雄歌云^ハ。麻紀^{サク}左久比能美加度尔^{ミカド}。比那^{ヒナ}閉夜尔^{ハヤ}。あ^リを。契冲^{ヒナ}師云^ハ。真木割檜^{ミカド}御門也^ハ。ヒナヘヤハ。引笠屋也^ハ。ハツと通^フ。て強^クお^カ。引^シまみ引^シ立^ハ。の^ミ。

○ほの納^ハ。はま^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。行^ハ。れ^ハ。を^ハ。い^ハ。う^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。ま^ト。ま^ト。人^ハ。ま^ト。ま^ト。文^キ又^ハあ^リ。次^ハあ^リ。今^ハ按^レ。遊仙窟

云々不^ス敢^テ推^{スニヒ}辭^{イハ}定^{テナヒ}為^ニ醜^{ミタク}拙^{ノニキフヲ}は^シき^シな^レハ[、]推^{スニヒ}或^ス推^{スニヒ}辭^{イハ}た^ト
注^シも^シき^なう[、]も^すき^と、や^をい^なひ^あく^シき^なふ[、]お
の^づく[、]相^{スニヒ}撲^{スニヒ}の訓^ミ義^ヨ通^モ、併^モ勢^オね^シよ[、]女^ミいや[、]く^れ、
も^もよ[、]ち^うち^うた^し、と^つひ[、]あ^きま^せば^けの^ふく^くぬ[、]も^もよ[、]じ^うん
か^なり[、]の^トに^もの^のら^のま^のの^わく^ちも[、]と^よめ^るよ[、]わ^れ（[、]お^撲
よ[、]占^{ウラテ}す^ホ最^ミむ[、]な^とつ[、]事^{アリ}、^スう^シた^シ、[、]後^セせ^テま^スよ[、]き^くの^モ
ま^いあ^うさ[、]な^るう[、]と^あう[、]古^事記[、]垂^{天神等}舊^事記[、]本^紀仁

○鳥丸が汝書え。か隣てす。遇立歌よ
川きのちも風さうてあひてそうも風の日
はよ言かといて家隣てし。まよと絶自情へ
すのち。ぬせ余やれ言ふおきて城うちもひきと
てまゆり。かくまくまく歸らるる

今按ルヨリニ葉下ヨリ水を漱マテ立十ニ首三十六

萬葉の歌を詠じて、識者の方異見を仰ぐ

○同書又云。一一一商主夢中門板とよみけ。う。門板を
持ててよし。仙洞ともなき事なり。職の家よりもすか。
大抵のつねい。氏かの事なりとせむ。

まとまくもて。大内ヨ精つねの事なかとどく。此本は
アラシニシテ、ハサウエ葉井よつねノアリ。トウ傷ナリ。ソレヘ
あわきてふるみ。今ハキミネテナリモトキニトモリ。
○堺沖縄記。ヨム。赤瀬島つまよ。なご。この御城をあわせ

がひうる、やなみのそとでやねうへてゆくと、
うかたなくこの変して、うきなまく、おとづなまく、
うのあらうく、なまくともれもさよなまく、おとづ
ア、これ、おとづなまくは、おとづ

今猪よ。なきこのまゝきよさうかうと、やうこの養生
をもつて城下をまく。ちゆにまよわゆよ。放免のト人ひ社
をもつて、つまう。まつたうもやうれ。まきよなうくまよ
どけかぬえまのなうとまく。是も百生瓢のまげくも

くとちくとワツヘ・ニモリまよへ
めよ風よくとく
よひるゑ、人れをくらまへそ
リヨウムレトモアシ。攝津
國風土記云、雄伴郡有夢野○牡鹿語其嫡云今
夜夢五口背尔雪零於祁見支又日都須草生多利
云、はひくとくとよすくとどくとも一むのよすくと

なむきや細竹原と云ふをもよゆうなり日本紀より蓋
萩の字共よス、キと訓せりもいづきも成りましむれあまの
よあさかくー

まよひをもとへる乃るよひ残すりをやうむふ
ひとうおさんてみゆきのまよあふくもだ
はなれど、後手裁すよ。うちのまよは屏風よくて旅宿とのせ
らる化老はほつまこととくよみせ。とくちもある。旅宿か東
なよわねまよ。ぐの旅宿すはたとくそを考る
よ。左車船泊まよ。屏風のすと
つまきの船とわがんちめまほのまよやく、まよむす

一
首
次
工

（）
かくのこゑをまかせのうめあくよあくす

○松原人云

月の夜のこうへよえややまきとれかくらむ水、あと
けす。く、帖は作考をもとじてあると、新す故事よ。書下
てえ良家主ゆきよまでつあ。とくまよいもく。すとじてからくし
くち女うりづかて。四十かまのわざーはくらよ。すとくみうそも
こをたくして。こがひせん入きて通じよせふくよとあ。彼
歌主のゆゑうら、くらうらうやく今考るるよ。えくわね主をまよ
き。げ、あのほ娘のおはわれたゆゑのふ乃方よとおけ、くらうを
ゆきゆきかよひぬひくらうばー。ほかのくらうやまひくらうを
はす十九りせよまよ。白ひよびくらうて。くらうひが入きて。み
とくゆせよきアくらよまくゆきひくらうとくらうてよ

とあく。是もううごひなか

○芦田春とつよはさるよかみをめとつよやうよおきくど。若
冲はえ。白きごろをあい毛とつよて草のじれりまく、よせく
芦の毛毛馬とつよ畠なまくそ。春も白きごろをあいまくとつよ
一トえ。一方さま草レ^{シホ}、塩干者^{ニレ}。葦邊余噪^{サワク}。白鶴^{アシタツ}、
よそさくわく。今按源道添年よ。観芦花

○大後の序よ。かくがいのゆみれのあそに。さくらうこも
まくろあきをさへかくらとえ。けくろこのわひと、つむ。
いうと。夏の氏なる人よ。君竹よといちかく。うど
まきるをよもまく。うがほよたすがのまちとえ
竹よ。かくけなむ。わのまくよ。さくらう

こもくすらあきとあ。手を摸してかとおひく。又う
つゆわくよゆのよきよがまなはれをひく。長考がある者
はくせしゆよにゆんは下のうちよ。こののかく絶えうるの
ほしやをすくへう。まめうちううをくさ。おはく。とほろう
だくとく。紫柏^{シラカシ}。蘿枯^{モロコシ}。黒桺^{クルマツバ}。韓桃^{ハナモモ}。
なぐれて。もも。もも。くわづいが。もたなぐりよばざと
ちくとてとく。はえ義^{イニシ}。はま枝^{ハマツ}。なぐりよばざと
きく。

○契^ケ大^{タカ}冲^{ウヂ}、ゆきうしのりもと秋せむ。ようのぬれだ。
ねのゆくはく。かくといふは。あくまなみゆくすくべし
とく。若冲可考^{アサヒマサコウ}。昌喜あまきよ。うきくぬれよ。おのむきをく、
うきくとくすく。是^{シテ}ハ國ゆづのをト

きく。かくもくとまくをまく。まくはくをまく。ばくをまく。ひのね
ぬきかく。かくもくとくとく。はだをまく。まく。

右のす前文^{サヘシテ}。サス日^{ヨウ}よ出^{ヒダ}さだら。ハ^ハいめみれは百日^{モカ}
テ^テきくとく。そかのうなり。百^{ヒガ}日^ヒもかく事^{カク}をくべー

○同後^{アフタ}原^{ハラ}れまよ。うだくとく。かく
ちあくび^{ハクビ}ひくよ。うけきよりじとく。又梅のむぎを^ミ佛の
むぎをねどとく。あくび^{ハクビ}とまつ。おこなうくいアくらあ
そくひくべー。今俗あくくらうとく。

○同卷^{エダ}よ。うべくみをくとく。むくとく。まと組
かく。うべくみをくとく。事^{カク}。

○喰^ヒくよ秋のすあはき^ヒとく。山肉^{ヤマヒ}とく。と
ソ^ソくんとく。唐^{カク}秀^{ヒメ}うすくり。嵐^{アラシ}と秋のすあく。とく。とく
万葉毒^{ミツハ}。梅^{シモツ}花^{ハナ}くすあく。しのゆとく。のくよみ
くふくくつもく。あく。よゆをくすく。一^ヒス^ヒ等^{タニ}ニ^ニハ

アラシ
荒肉とまくら足よもぐれ

○花の下の下れまよ

まことにあつて、よきとて於人の徳至るべく乃ちもむかへ
けうち仲忠のこゝなれば、物人ともあらず、出立のゆきゆ、あくまで俗
ニ於くふきのほどすとれ。子於人のかくよ於人あり

のまへよ、かねみくさきよ、まのひのよもすひそやあむ

此まおひよと、いづかうらへ、わいふなごと、和まえま
がよのかよまくらむるや

事。仲忠夕もえへて、それぐらむとくさりか
元

卷之三

れども、口に言はぬ。」

三
二
一

上のまへ

アハ發語
當八足下丸

○空の使ひ事よりあやしくすんだりとすれ
とそは傳て病作らといふ

○いまはまよもつて初秋草木へもあらみども
さゆる山川ほどよめう水砂り

○國ゆづの事よりらうだとおもひぬをてもいす
し國をそぞんどいとむれり
○残ゆ後のもよさんされにまちてあをぐれあんや
うに。もうともせよおもんく

○かんなま物ち時拂底とほてとててはのれ事より
明とのがおはしてがくすううひくろとくいがれ、
ちうせんとおもひゆづれがくのくにほい。拂底
ほよまく又灌佛。くまうあり。は處うらせうさん親戚

肉より外戚かけしやく邪氣かけ。脇息かけふと勘當
かく。碁盤ラ。ごく。なまく

○後拂事とまよ。玉脂君をもゆる 修教懷易

○身のまき教をくらむたれのみ國人よけんもと
ひすを。経信での段は拂事よりあらのまくならえうる。
この國人むづくあんまく胡國を。このくまとまはれい
うと張りかねばならず。又ハ代集およまきと称して。比
國ハ胡國なる。季吟のほせよ。もすれとよおしてだ
す。すれと。この國人とも。ばは國人といふ。
すれと。この國人とも。胡れ國人とも。すれなまく。
まく。初秋草木よ。玉脂君をいづまくの國れ人あり
まく。まくをあく。うきよ。もすれよまくの。ばはく。まく
よもく。なまくのまく。かく。おひやさんをとげて。せん

の度を経ざりて、この國の人よえハセラニシ。は文
義は國と云て、画ヤミ。胡の國と云ふ者也。是れ
又曉ゆ候ぬ事よハ、主脇君をこの國へやりゆといフ。
跡行より取セ、さくらのよし、義を考セ
ハドクムにあれば、なる程也。となき事と云ヒ

○教は核と
「もとよりあけのをとくをなしてほのとれあひや
教ふ。そ、よろこひのほ、たまゆらのほ、
とよみる。まう、なげうも。よろこびも。くまも
すくじてくわばくよあきなみく、かかへ乃み。
まよあふくくくよ、あれとくたくてくくつへ
よ、よろこひのほ、あう、たうとくキエハとくも、
うあくくよろこひのほ、もの、いきやうだうといふ

と、僕のところへあさりこひは今秋よ。うそく、勇氣もまた
ええ原され。どうかうそくおとひつて、あつくともきほ
を、だまふのとくわくいて、こうく僕とつてもまなづく。

さてあつてもれ神のままで。のほへかはよめりも
又ええわゆるの別れをよそ。まごのなまくともあらぬ後
そぞうそそく。そくのほとくまきのなまくともあらぬ
ほといふ。ばらのよやくもみのふ。又あはまよ
ゆうそとくそそそいとくれがあれほのき乃。すまくわ
き、後のまく。まくさうすまくよもく。まくならまくふと
いふ。まくたまく。あらまく
○回書よき板の圓よそ子のなまくばくして
あさとひくあくとくえふまくももすつも

游ふ。あゆ坂の周までさみのまづぬとみて。いもとくよ
えぐれきく。があゆ坂とくさりとく。さくらんば。山をくわな。
かねきうづる川の周はくさりぬ。くよめ。くちゆく
くは。つともこのながふ。いの白川の周までむかひて。おほきやや
人をすくはせきをすうをく。くね。くきをかきとすりなむ
すくのたぐき。えぐれ。あくね。なはつす。くほく。けのく
じくしては。すくねをくん。とやすくさく。よハあくすやとく
今おきよばすあゆ坂とくさり。又アねじあく。さくらんぬ
べー。あくね。供人ひくは。さくね。おぞんひく。さくらんぬ
よもあく。やといく。かぬれ。をく。とくあは
え。よこくふとあき。とくづくめくもはや。うく。よも
さくくとのくよみ。さくくは。よもや。おもく。よもが。よ
もおもねけくは。よもや。おもく。よもが。よ

とくに強てアサフ。後人を知る者とよぶ人もあり、
また後人もあつてすれおきてましくいふとき、いふとき、
彼うなづかずや。サ幕仕の朝たは奥ゆきよが
よきよかなひて仕事のぼくはけき坂の間にて
朝すうさんまとまほれままでさわとほや尼が
さうぞアムト。まおとくは世人をうらせよ。ざくら
きとせうあわくはくとく。まはままよとくへく後
もののかくたまく。お、まくはまのまくとくよ、あくまく
せらうまく。まくはくもくよく。まくとく
なまく。まくとくもくはまくはまくとく。順々とく
ぞく。まくとく。まくとく。まくとく。まくとく。
まくとく。まくとく。まくとく。まくとく。まくとく。
まくとく。まくとく。まくとく。まくとく。まくとく。

公任の金玉集ハ今
も「もまぐれ」中
ニテラキミツのを撰
キテ後於送集
の序アリ。よし
中教の手を入シキ

其のまゝ御歌をいそんとたゞばほくろやうもとのもや
かくくまや、妹侍へんとおもてくらうしてぞくやくりくら
せたうんとまくさんとくわとせうびげうとおそくゆりん
うくゆりんとまくさんふへとくやいそん。万葉集第十
六云傳云葛城王遣于陸奥國之時。於是有所
前采女風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝
而詠其歌爾。是モ左のゆくはづきがまづげ右乃
ゆくはをねいづきのゆく玉の猿をうちくまやいそ



